

論文紹介：大学生のギャンブル経験と抑うつに関連

—大学生のメンタルヘルスのために—

鶴田 昇也 (22211248st@tama.ac.jp)

1. はじめに

この論文を選んだ理由は競馬をやっている、ギャンブル依存症になってしまった人はどういう思考、感情になってしまっているのか気になったため、ギャンブル障害の人の診断基準を用いてギャンブラーに診断し、抑うつとの関連を述べていく。

2. 問題と目的

大学生のギャンブル経験の実態およびギャンブルと抑うつとの関連を調べることを目的とする。

3. 方法

この研究は、1校の地方に位置する4年制私立大学の学生を対象として実施された。調査には合計103名の学生が参加した(男性65名、女性40名、平均年齢20.02歳)。2016年10月に実施された調査では、質問紙を使用して行われ、学生たちは大学の講義時間に質問紙を配布され、回答後に回収された。

調査では以下の内容を取り上げた。1)参加者の年齢、性別、およびギャンブルの開始年齢に関するフェイス項目。2)「修正・日本語版 SOGS 学生用」を用いた病的ギャンブルのスクリーニング。この尺度はギャンブルの嗜好や頻度、賭け金額について質問します。スクリーニングの判定基準は、20点満点中5点以上で「病的ギャンブル」とされ、4点以上で「問題ギャンブル」とされる。3)「日本語版 SDS 自己評価式抑うつ尺度」を使用して抑うつの程度を評価した。

4. 結果

ギャンブルの開始年齢をまとめた結果、「ギャンブル経験なし」は65人(63.1%)であり、18歳から20歳の間に28人(23.3%)であった。

「問題・病的ギャンブル」と「非問題・病的ギャンブル」の結果、「問題無し」が86人(83.5%)、「問題ギャンブル」が3人(2.9%)、「病的ギャンブル」が14人(13.6%)であった。

男女別の問題・病的ギャンブルの割合の分布の偏りを調べるためにクロス集計と χ^2 検定ならびに残差分析を行った。その結果、男性において「問題・病的ギャンブル」が多かった。女性には「問題・病的ギャンブル」に該当する者はおらず、男性では「問題・病的ギャンブル」に該当する者は17名(27.0%)であった。

また、抑うつ状態ごと(「正常」「軽度」「中度」)にt検定を行った。その結果、抑うつ程度「正常」と「軽度」には、有意な差が見られなかった。抑うつ程度「中度」の「問題・病的ギャンブル」群と「非問題・病的ギャンブル」群の2群間で有意な差が見られた($t(22) = 3.29$, $p < .01$) (表6)。

5. 考察

調査結果から、「『問題・病的ギャンブラー』と判定されたものは「問題・病的ギャンブラー」と判定されなかったものと比べて抑うつ得点が高いだろう」は支持されなかった。「『問題・病的ギャンブラー』と判定されなかったものは、『問題・病的ギャンブラー』と判定されたものと比べて抑うつ得点が低いだろう」は支持されなかった。しかし、「男性は、女性に比べて『問題・病的ギャンブラー』と判定されるものが多いだろう」は支持された。

また、ギャンブル経験の開始年齢については、60%以上の学生が未経験である一方で、経験者の多くは18歳から20歳でギャンブルを始めていることが明らかになった。これは、ギャンブル依存症の患者の多くが10代後半から20代にギャンブルにのめり込んでいる。

さらに、アルコール依存症の研究からは、早期の飲酒開始が依存症リスクを高めることが示されている。これと同様に、ギャンブル依存症を予防するためにも、大学生のギャンブル開始年齢を遅らせることが重要であると考えられる。

SDS(自己評価式抑うつ尺度)の分析では、一部の抑うつ症状が「問題・病的ギャンブラー」としての診断と関連していることが示されたが、全体としての有意な差は見られなかった。以上から、ギャンブル依存症になる人は早い年齢から始めているとなりやすいことがわかった。

6. 引用文献

牧田浩一 (2019). 大学生のギャンブル経験と抑うつとの関連: 大学生のメンタルヘルスのために. 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 56, 163-170.

表6 抑うつ「中度」群の問題・病的ギャンブル, 非問題・病的ギャンブルのt検定

	人数(人)	SDS平均値	SDS標準偏差	t値	有意確率
非問題・病的賭博群(SDS得点「中度」)	19	52.000	4.485	-3.297	0.003
問題・病的賭博群(SDS得点「中度」)	5	60.400	7.127		